

持続可能な木材産業をめざして 取り組む学生の姿

岐阜県立森林文化アカデミー
富田 守泰

アカデミーでは、2年生になると課題研究テーマを学生自身に探してもらうことから始まります。問題意識をもってアカデミーに入学した学生は、1年の講義などでは知り得なくて、さらに深く知りたいことを中心に研究に取り組みます。そのテーマは学生それぞれに違いますが、若い彼らが「**自分が携わる業界の将来を見通して考えていること**」は、即ち岐阜県の林業、林産業、地域産業の行く末を透視することに他ならないとも思えます。木造建築の分野では、人口減少社会における「新築より、リフォーム」の流れや、住環境、省エネといった項目が並びます。林産業界に関わる立場の私は、昨年、次の2つのテーマの指導をすることになりました。特に林産業界向けに学生の姿の一端をご紹介します。

●現状把握としての木材乾燥CO₂排出量、 解決策としての天然乾燥の事業化

ひとつは「木材の乾燥とCO₂排出量」。もうひとつは「天然乾燥コストの明確化と事業展開の一考察」です。注目すべきは、いずれも林産業でもっとも重要であるにもかかわらず、もっとも遅れている建築用木材乾燥の分野であり、また、今後のエネルギーの状況次第でどのように変化するか先行きが見えない分野であることです。そして、学生にも将来の林産業にとっても、そこが重要であることを直感的にでも感じているということです。その現状把握としての木材乾燥時のCO₂排出量であり、解決策としての天然乾燥の事業化なのです。

その内容の一端を紹介します。京都議定書締結以降、CO₂排出量削減が叫ばれているにもかかわらず、この国は本当に対策をしているのかと考えさせられるのは、木材乾燥における重油消費の現状を知ったときです。木材加工業の中に占める木材乾燥におけるCO₂排出量は、小規模の国産材加工工場ほど高い。しかし公にされている値は、外材を主体とした大規模工場の値(CFP)を用いていて、大規模木屑ボイラーの燃料消費で、化石燃料の比率が低い。それに対して、地方に存在する国産材生産の小規模の工場ではボイラーマンの設置や木屑焚きボイラーの初期投資額の高さから重油焚きボイラーにしているのが現状です。(図)

その解決策は、規模を大きくすることです。現在国や県が主導で製材工場の大規模化が進んでいる。規模が大きくなれば、ボイラーも大きくすることができ、木屑焚きボイラーによるCO₂対策が進む。しかし地方の中小製材工場のすべてをこのように大きくす

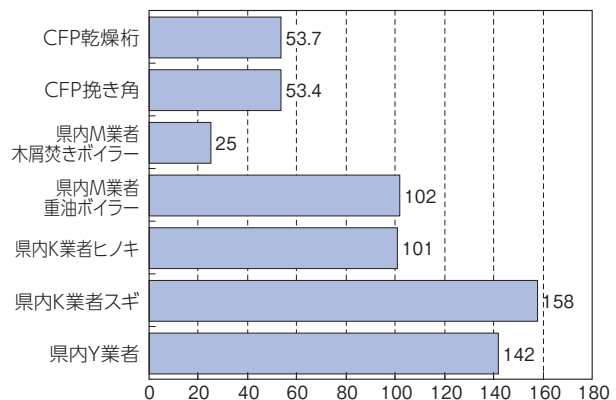


図 CO₂排出量 (KgCO₂/m³)
2011年度岐阜県立森林文化アカデミー課題研究講評会梗概 佐治あゆみ
※CFP カーボンフットプリント例

ることはできない。そこでできることが天然乾燥の事業化です。全国各地で天然乾燥が行われてはいますが、その需要を地域の工務店と密接にとりあうことで、人工乾燥材に対抗し得る価値を生むのではないのでしょうか。

●持続可能な取り組みは同感を得る 営業戦略に繋がる

この2つのテーマに共通することは環境面、資源面から見て**持続可能な産業のあり方**です。木材産業、特に国産材振興を旗頭に進めてきた補助金漬けの国産材産業は、国の方針に左右されてきています。しかし補助金という、打手の小槌の先行きが怪しくなってきた状況下では、完結型でシンプルに物事を考え直すことが重要と思われま。業界のみなさんは、シンプルすぎて、素人臭く、頼りないかもしれません。しかし業界にとっては彼らの素直な考えをいかに受け入れていくかが将来の種を芽吹かせることになると思えてなりません。

嘗て、学生が似た考えを提案し、天然乾燥が製材所で実施されている事例もあります。しかし、実行し易い、部分的な面のみを吸い上げるのではなく、山から里までを一貫して捉える理念や思いとともに実行することが重要で、それこそが**本来の消費者の同感を得る営業戦略**に繋がるものと思われま。天然乾燥事業化のテーマに取り組んだ学生は、県内製材所に就職しましたが、その地域で天然乾燥を実際に事業化すべく練っています。応援して、ぜひ活用してあげてください。

●詳しい内容を知りたい方は

TEL(0575)35-2525 森林文化アカデミー まで